東南アジア研究　34巻1号　1996年6月

「インドネシア」の見方——行政空間の認識とその変容——

加　藤　　剛*

Views of "Indonesia": Changing Conceptualizations of Administrative Space in the Late Colonial Period and the New Order

Tsuyoshi KATO*

This paper compares different conceptualizations of administrative space in the late colonial period and the New Order and attempts to understand the significance of this difference. Specifically, it compares the listing order of the provinces or their colonial equivalents in such government documents as *Regeeringsalmanak, Statistical Pocketbook of Indonesia,* and *Statistical Yearbook of Indonesia.* First, the paper reviews indigenous conceptualization of space in pre-colonial Sumatra and then discusses changes in the ordering of Sumatran residencies between the early 1930s and after 1939. During the 1930s, the Sumatran residencies seem to have been listed in the order in which they had come under direct Dutch control. From 1939, they began to be listed from the northern to the southern end of the island.

The "provinces" of the colony as a whole were listed more or less in clockwise order during the late colonial period, starting from "Java and Madura," moving to Sumatra, then to Borneo, Celebes, Manado, Molukken, Timor, "Bali and Lombok" and implicitly ending back at "Java and Madura," thereby closing the imaginary circle of listing. The clockwise, circular listing of provinces highlights the central importance of Java in the Netherlands Indies.

The post-independence listing of provinces during the 1950s and 1960s resembles the colonial one. A major and critical difference, however, is observed in eastern Indonesia. The post-independence listing of provinces in this area does not follow the clockwise movement. Rather, it runs from Bali to Nusa Tunggara, and from Maluku to New Guinea, thus highlighting the eastern border areas, the areas of contention after independence.

A completely different mode of listing of provinces was established by the late 1970s. It can been seen in *Statistical Yearbook of Indonesia 1976* published in 1978. Interestingly, 1976 is the year when the geographical expanse of the Republic of Indonesia was finally bounded according to the wishes of Indonesian political and military leaders, as East Timor was formally incorporated into the republic in this year. We may also assume that after putting its house in order, so to speak, in Java in the late 1960s and during the first Five Year Plan, the Suharto regime turned its attention increasingly to the whole of Indonesia from the mid-1970s, for which it supposedly needed a well-organized view of the entire country.

In the new mode of listing, which is here called the bird's-eye view of Indonesia, the provinces are basically listed in two strokes from west to east: the first from Sumatra to Java, Bali, Nusa Tunggara and East Timor; the second from Kalimantan to Sulawesi,

* 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Maluku, and Irian Jaya. The bird's-eye view projects an image of a homogenenous Indonesian space which consists of twenty-seven provinces of presumably equal political standing.

The paper further examines some of the New Order's cultural and educational policies during the 1970s and 1980s and concludes that the provinces are now filled with their respective regional cultures (*kebudayaan daerah*), regional histories of independence struggle (*sejarah perjuangan daerah*), and so on. The provinces are no longer simply administrative spaces on the map. They can be experienced, studied, identified and identified with, and even emulated in the case of regional architectural styles and wedding costumes. As the provinces are considered politically equal in the homogeneous space of Indonesia, the regional cultures and regional ethnic groups which represent the provinces are also considered equal. For example, they are treated "equally" in the Taman Mini Indonesia Indah or "Beautiful Indonesia" in-Miniature Park.

Suharto's New Order was born after Idonesia had gone through a number of acute conflicts associated with regionalism (*daerahisme*) and ethnic rivalry (*sukuisme*) . Given this background, the bird's-eye view of Indonesia is remarkably suited to promoting the image and ideology of equality among the provinces and at the same time de-emphasizing the political and cultural predominance of Java, which has in reality been increasing during the New Order.

はじめに

インドネシアの国民統合や国家統合を議論する場合，これまでの私たちの関心は，ナショナリズムの思想や運動の歴史，イスラーム改革運動，独立戦争，独立後の共和国政府の政策，さらには統合を脅かす反政府運動や反乱，各種政治集団間の連携・確執，スハルト体制下における思想教育政策などに注がれてきた。いわば，明示的に国民統合，国家統合と関係する事象に注意が向けられてきたといえる。これらのトピックの重要性を十二分に認めたうえで，本稿では，少し視点を変えたところから話題提供を試みてみたい。

言うまでもなく，「インドネシア」は地理的空間であるだけでなく，すぐれて政治的空間でもある。政治空間としてのインドネシアの認識枠が，オランダ時代と独立後とではどのように異なっているのか，またその違いはなにを意味しているのかというのが，本稿の問題意識である。

為政者側における政治空間「インドネシア」の認識形態をもっともよく体現しているのは，国境とともに，内政的には行政空間としてのインドネシアの認識であろう。本稿の関心は，行政空間としてのインドネシアの認識枠と，その歴史的変容の考察にある。具体的には，最大地方行政単位である現在の州（*propinsi*）と，それにほぼ対応するオランダ植民地時代の行政単位が，政府文書などにおいてどのように配列されているかを検討する。[1] これらの単位は，植民地時代，共和国時代ともにおいて総数が30以下であり，この数は，人間の一般的記憶能力を考えると，人々の認識に馴染み易い数量の範疇に入る。現在の行政組織を例に取ると，州レベルの

1） 現在の州に対応するオランダ時代の行政単位は，時代と地域によって異なるが，1920年代以降の“ジャワおよびマドゥラ”では *provincie* ないし *gouvernement* が，それ以外の地域では *residentie* と *gouvernement* が概ねこれに相当する。

下の行政単位は県（*kabupaten*）ないし行政都市（*kotamadya*）であるが，これは全国で300前後存在する。これらの名称と所在を記憶するにしても，一葉の地図上に線引き・表現するにしても，県や行政都市をインドネシア全体の空間認識のために利用することは不可能である。

ちなみに，1992年現在の，東南アジアの多人口国の地方行政単位の総数を概観すると，ヴェトナムは50省，3中央政府直轄市，タイは73県，3特別自治体，フィリピンは73州，1首都圏，ミャンマーは7地方，7州である［東南アジア要覧1992年版 1992］。ミャンマーの行政単位数がきわめて少なく，逆に他の多人口国のそれが，インドネシアの行政単位数に比べはるかに多いことがわかる。[2)]

数の配慮を離れても，州は「インドネシア」全体および部分を認識するうえで，もっとも包括的かつ有意味な行政単位である。スハルト政権の政策を見ても，内務行政，教育，文化政策，思想教育などの遂行のうえで，もっとも重視している行政単位は，国家以外には州である。州は国家ほどの高い抽象度を備えてはいない。他方で，適度の具体性・個別性に富んでいる。「適度の」とは，県が過度の具体性・個別性に流されがちであるのに対し，州はそうならないだけの抽象度を有しているということである。こうした点も，政府によって州が重視される所以であろう。

本題に入る前に，行政空間の配列基準をめぐる設問，それもやや突飛ともいえる本稿の設問は，近代以前には成立しなかったであろうことを確認しておきたい。そもそも，政治空間を行政空間に重ねて把握する認識自体が，すぐれて近代の産物である。かつてのパキスタンのような例外もあるが，一般的に，政治的に閉じられた陸続き，“水・海続き”の空間を境界線で複数面に細分化するところに，行政空間，つまり面としての行政空間が誕生する。また，細分化された行政空間は，官僚組織によって統治・管理されるが，近代的官僚組織の特徴の一つは，膨大な量の文書の作成，それも比較的公に開かれた文書の作成である。これら公共性の高い文書において，行政空間は，当該空間に関わるデータとともに，なんらかの順序で繰り返し繰り返し配列されなければならない。自ずと，配列順には，それなりのパターンが形成されるものと想像される。

本稿の問題関心，すなわち政府文書に表れる行政空間の配列順は，インドネシアについて，とくに有意味な問いかけである。州の総数が多すぎも少なすぎもせず，また島嶼国家で国土の形も複雑なところから，行政空間の配列順は自明ではない。したがって，特定の配列順に，ある種の政治的意味合いを読み取ることも不可能ではないからである。

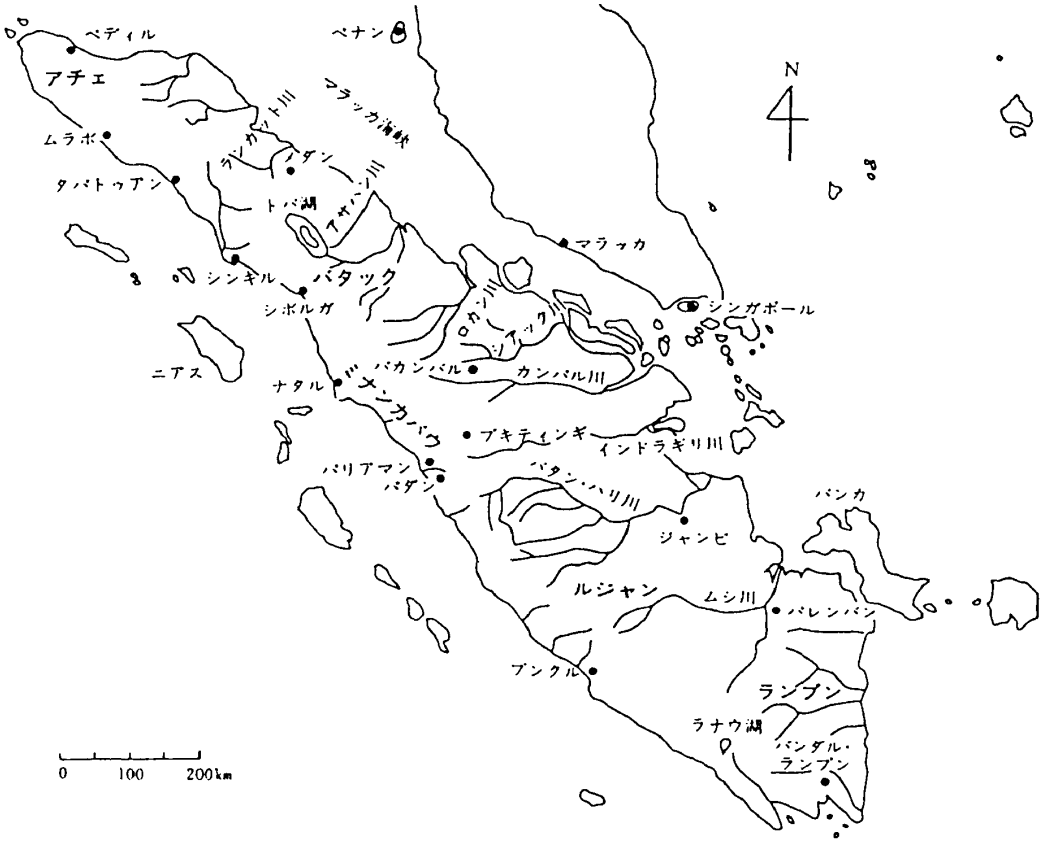
2）フィリピンには，州の上にregionが存在するが，実質的な行政機能は備えていない。上の例から，一国の人口数と地方行政単位数が単純に相関するものでないことは明白であるが，行政単位やその数がどのように確定されたのかを含め，東南アジア諸国における地方行政制度の発展史の比較は，今後開拓されるべき新しい研究分野である。

植民地期の行政空間の認識を語る前に，植民地期以前の空間認識がどのようなものであったかを，多少とも検討しておく必要があろう。というのも，行政空間に基づく空間認識の特徴は，それ以前の認識形態，インドネシアについていえば，植民地期以前の空間認識との対比で，より明確となるであろうからである。ただし，植民地期以前のインドネシアについて，その空間認識を一つの全体として議論するのは不可能である。ここでは，私の専門とするスマトラの事例を中心に，この問題を考えてみたい。

本稿のⅠ節，Ⅱ節は，スマトラの空間認識が，植民地期とそれ以前とではどのように異なるのかを扱う。Ⅲ節から，「インドネシア」についての検討に移る。

Ⅰ　植民地期以前の空間認識 ── スマトラの事例 ──

スマトラ島は，マラッカ海峡とインド洋に面し，赤道線を挟んで北西から南東の方角に延びるさつま芋状の島である（地図１）。[3] 面積は日本の約 1.3 倍，インドネシアの総陸地面積の 25

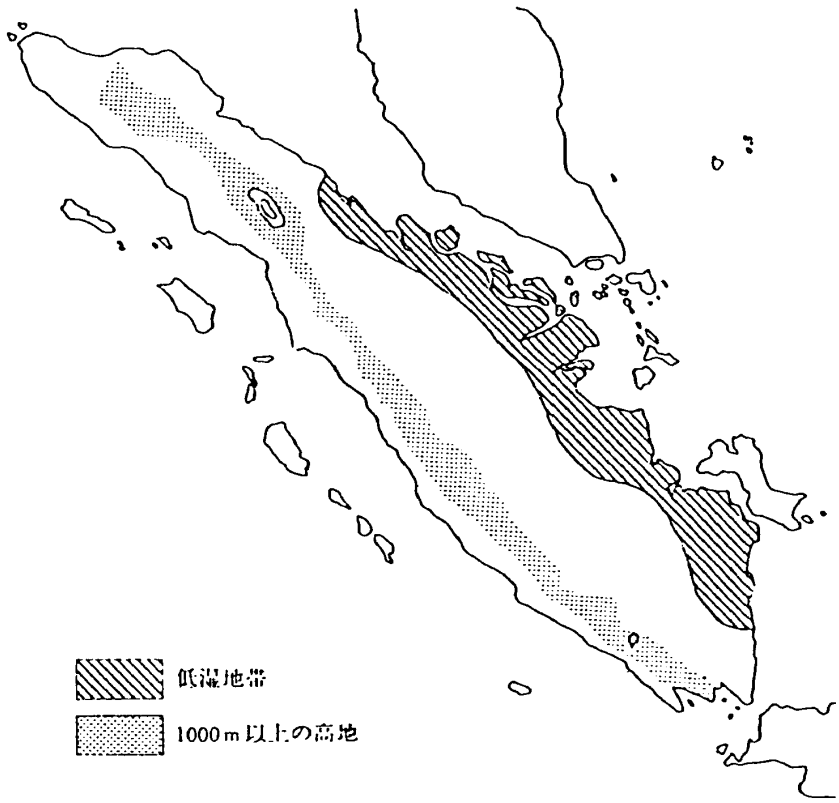


地図１　スマトラと主要河川

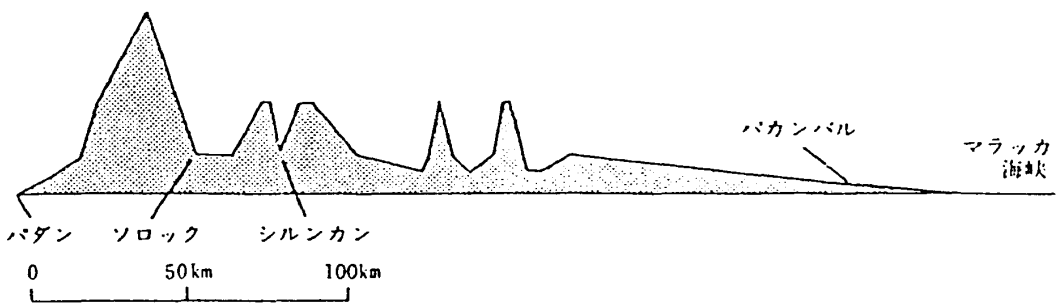
3）　Ⅰ節，Ⅱ節に関連した議論については，加藤［1992］を参照。

パーセントを占め，共和国の最西端を画する。熱帯多雨の気候に属し，島の多くは密林に覆われている。

脊梁山脈バリサン（Bukit Barisan）が島の西側を縦に走り，山脈地帯にはクリンチ（Kerinci）山，ムラピ（Merapi）山など50以上の高山・火山が点在する（地図2）。この地帯には，トバ（Toba），シンカラ（Singkarak），ラナウ（Ranau）などの湖も多い。山地には，ガヨ（Gayo），アラス（Alas），トバ，アガム（Agam），ラナウなどの肥沃な高原・盆地が広がり，稲作を中心とする社会が古くから発展した。これに対し，山脈の西側の傾斜は険しく，海岸ま



地図2　スマトラの地形図



地図3　スマトラの断面図（中央スマトラの事例）

出所：[Sandy 1986：61]

での平野の幅も狭い。山脈東側の傾斜はなだらかで，丘陵地帯を越えると 140 ～ 200 キロ幅の沖積低地や湿地が海岸まで続く。カンパル（Kampar），インドラギリ（Indragiri），バタンハリ（Batang Hari），ムシ（Musi）などの大河川が流れ，これらの川が，かつてはマラッカ海峡と山脈地帯を結ぶ重要な交通路を形成していた。

島の広さ，生態系の多様性を反映して，スマトラの動植物相，天然資源，農産物は多種多様である。同様に，文化の面でも，スマトラは多様である。これは，スマトラを故地とする種族の数，彼らの生業形態，親族制度，宗教，物質文化などの多様性の中に見てとることができる。

スマトラをなんらかの基準で概観しようとする場合，もっとも“自然な”空間認識の枠組は，東西軸の枠組である。この枠組のもとでは，スマトラは基本的に，バリサン山脈地帯，東西の海岸沿いの地域，そして両者を結び付ける河川流域の関係として理解される（地図 1，2，3）。山脈地帯は人口も比較的多く，森林資源や農産物にも恵まれ，歴史的に，河川沿いの地域，海岸地帯，さらには東南アジアの海域世界，とくにマレー世界へ，森林産物，農産物，人的資源を供給する役割を担った。他方，海岸地帯は，外の世界と内陸を結ぶ窓口の役割を果たし，河川流域は両者を結び付ける交通路を形成した。

東西軸の枠組は，金太郎飴を切るように，スマトラ全島において適用可能であるが，中央スマトラにおけるそれがもっとも明確な形を示している。というのも，中央スマトラが，スマトラ島の全長の中で一番幅の広い地域であり，かつ山脈地帯から東海岸に向って流れる航行可能な河川も，ここでの数がもっとも多いからである。

スマトラの土地の人々の空間認識はどのようなものかというと，歴史的には，川の上流（hulu）と下流（hilir）の対比がもっとも日常的な認識枠であった。川の多くが概ね東西に流れるスマトラ，それもとくに中央スマトラでは，上流・下流の認識枠は，基本的に東西軸の枠組として特徴づけることができる。

東西軸に則った認識枠は，「ミナンカバウ世界」（Alam Minangkabau）という概念にも読み取ることが可能である。ミナンカバウ世界とはミナンカバウ文化の影響下にある地域を指し，具体的にはルハッ・ナン・ティゴ（Luhak nan tigo）と呼ばれる三つの文化的中核地帯と，ランタウ（rantau）と呼ばれるミナンカバウ文化の拡大する周辺開拓地域から構成されている[Kato 1982]。ルハッ・ナン・ティゴは，バリサン山脈の肥沃な盆地ないし火山山麓に位置するのに対し，ランタウは，中央スマトラ西海岸沿いのランタウ・パシシール（rantau pasisir）と，バリサン山脈から東海岸へ流れる河川沿いに展開したランタウ・ヒリール（rantau hilir）とから構成されている。山脈地帯を中核とし，西の海岸地帯，東の河川流域地帯をセットとして認識する「ミナンカバウ世界」は，東西軸の認識枠に沿ったものだと解釈できよう。

東西軸は，スマトラの生態と歴史に培われた枠組である。土地の人々の生活感覚，世界観にも取り込まれた枠組である。それだけに，島の内包するダイナミズムを理解するうえで，きわ

めて有効な認識枠である。

歴史的に，東西軸の活性化の度合，つまり東西軸に沿って実際に起こる交渉の度合は，時代時代によって異なる。とはいうものの，東西軸はスマトラに“自生的”であるだけに，その活力は島につねに内在する。ただし，河川路に代わる陸路の重要性が増大するにつれて——ちなみに，陸路の重要性の増大は，近代的国家権力の影響力の増大と同義であるが——，東西軸の活力は大きく低下せざるをえない。

II　行政空間の誕生と南北軸的認識枠

スマトラ本島へのオランダの植民地支配の本格的拡大は，19世紀初頭から半ばにかけて，コーヒー栽培の盛んであった西スマトラから始まり，20世紀初頭のアチェ戦争の終結を経て，1910年代半ばまでにはスマトラ全土に及んだ。ただし，当初は，直接支配，間接支配を含めて，その支配の形は地域によって様々であった。

従来の東西軸の認識する空間は，点としての港，市場町，集落と，線としての河川，つまり点と線の組み合せから形成されていた。他方，オランダの支配したスマトラは面としてのスマトラであり，この面が境界線によって分割されることにより，それも単一の権力によって分割されることにより，行政空間が構築された。境界線の線引の基準は，山脈・分水嶺，河川などの自然境界や，種族的棲み分けなどの文化的境界，そしてオランダ植民地権力の都合などと多様であったが，理事州（residentie ないし gouvernement）の境界線に限ってみれば，一般的に，河川システムをそれほど分断することなく境界線が引かれている（地図1と地図5のスマトラを比較参照）。

行政空間の線引が成ったのちに問題となるのは，スマトラの行政空間をどのような順序で配列するかである。1920年代までには，現在のインドネシアにほぼ相当する領域がオランダ支配に入り，オランダ東インドの行政組織の整備も進捗するとともに，東インド全体の行政に関わる報告書，出版物も増えてくる。この状況下で，行政空間の配列順をどうするかは，けっして些細な問題ではなかった。

この点に関連して，オランダ東インドの年鑑である『政庁要覧』（*Regeeringsalmanak*）のうちの「内務行政」（Binnenlandsch Bestuur）の項を見てみよう。とくに，時代の終りに変化の現れる1930年代を取り上げてみたい。

『政庁要覧』において，1930年代前半から後半にかけてのスマトラ諸理事州の列挙順は，次のとおりである。スマトラ西海岸（Sumatra's Westkust），タパヌリ（Tapanoeli），ブンクーレン（Benkoelen），ランポン地区（Lampongsche districten），パレンバン（Palembang），ジャンビ（Djambi），スマトラ東海岸（Oostkust van Sumatra），アチェおよび属領（Atjeh en

Onderhoorigheden)，リアウおよび属領（Riouw en Onderhoorigheden)，バンカおよび属領（Bangka en Onderhoorigheden)，そしてビリトン（Billiton)（地図5のスマトラを参照)。一見，配列の基準が不明瞭であるが，おそらくこの順番は，当該行政単位ないし地域が，オランダ東インド政庁の直接統治下に組み込まれた順番を，ある程度反映しているのではないかと思われる。[4] 興味あることに，この配列順は，オランダ時代に採用され，現在でも使われている自動車のナンバープレートの順番とも一致する。スマトラ各地のナンバープレートは全てBで始まるが，そのあとのアルファベットの順番は，西スマトラ（BA)，タパヌリ（BB)，ブンクル（BD)，ランポン（BE)，南スマトラ（BG)，ジャンビ（BH)，東スマトラ（BK)，アチェ（BL)，リアウ（BM)，バンカ・ビリトン（BN）である。[5]

スマトラ理事州の配列順に関して変化が見られるのは，1939年になってからのことである。この年およびこの年以降の『政庁要覧』における配列順は，アチェおよび属領，スマトラ東海岸，タパヌリ，スマトラ西海岸，リアウおよび属領，ジャンビ，ブンクーレン，パレンバン，ランポン地区，そしてバンカおよびビリトンである。ここでは，スマトラの理事州が，北からほぼ南へ下がる順番で並べられている。先の東西軸との対比で，ここではこれを，南北軸の認識枠と呼ぶことにする。[6]

東西軸，すなわち太陽の昇る方向と沈む方向を機軸とする認識枠は，スマトラの河川システムを旅することにより，経験法則的に実感できる認識枠である。しかし，この認識枠のもとでは，スマトラ全島を一望のもとに見渡すことはできない。これに対して，南北軸は，スマトラそれ自体にとってはなんら本質的な意味を持たない。その実在を体験することもできない。しかし，南北軸は，スマトラ全体を視野に入れて，別言すれば島全体を支配して，はじめて意味をなす認識枠である。南北軸は，スマトラの外に位置する権力をして，島を行政空間に分解し，

4）『政庁要覧』および後述の『東インド報告書』に関する資料については，深見純生氏および五十嵐忠孝氏のご教示を得た。スマトラ各地へのオランダの直接支配の拡大は，理事州を単位として進展したわけではない。それだけに，上記の理事州の列挙順が，当該理事州がオランダの直接統治下に組み込まれた順番に対応するものかどうか，これを確認するのは難しい。スマトラ各地にオランダの“実際上の権力”（*daadwerkelijk gezag*）ないし直接支配が拡大した歴史の概略については，*Atlas van Tropisch Nederland*［1938］の10図（Blad 10）のaを参照。

5）BC，BFは存在しないが，これはおそらく，BG，BEと紛らわしいからであろう。

6）南北軸だけが，植民地時代末期のスマトラ理事州の配列順であったわけではない。例えば，『政庁要覧』と並んで，植民地定期刊行文書として重要な『東インド報告書』（*Indisch Verslag*）の1938年版第2巻，「第XV章政府機構」（*Bestuursorganisatie*）の「行政区分」（*Administratieve indeeling*）の項を見ると，スマトラ理事州の配列は，ランプン（ランポン）地区，パレンバン，ジャンビ，スマトラ東海岸，ブンクーレン，スマトラ西海岸，タパヌリ，アチェおよび属領，リアウおよび属領，そしてバンカおよびビリトンとなっている。同様の配列は1941年版の『東インド報告書』にも見られるが，上記の配列順は，まず，スマトラ本島を東海岸沿いに北上し，スマトラ東海岸のあとは西海岸に移動，海岸沿いをブンクーレンからアチェまで北上し，そのあとはスマトラの東部島嶼域をリアウ，バンカ，ビリトンと南下する図式になっている。本稿では，配列の基準がより単純明解であり，独立後にも引き継がれた南北軸を中心に議論を進める。

なおかつある秩序のもとに再統合して島全体を眺めることを可能にする。南北軸の論理は，文字どおり地図の上で島全体を眺めることによってのみ確認可能であり，地図の存在なくしては存立しえない。南北軸は，スマトラ外の権力によって構築された，きわめて覇権主義的な認識枠である。

“南北軸的”スマトラの認識は，1930年代末までには学校にも登場していたようである。例えば，1938年にオランダ東インドで出版された地図帳を見ると，スマトラに関する地図が5葉，スマトラ（Soematera），北および中スマトラ（Soematera Oetara dan Tengah），南スマトラ（Soematera Selatan），デリとタパヌリ（Deli dan Tapanoeli），西スマトラ（Soematera Barat）の順序で掲載されている［Reijen dan Lekkerkerker 1938］。対照的に，1914年に出版された地図帳の例では，掲載地図は4葉で，スマトラ（Soematra），スマトラ西海岸（Pesisir Barat Soematra），北部スマトラ（Soematra sebelah Oetara），南部スマトラ（Soematra sebelah Selatan）の順で掲載されている［Gelder 1914］。スマトラ地域に関する複数地図の掲載順において，北から南へと概観する地図が優先的に掲載されているかどうか，また，地図のタイトルに見られる島の分割法が2分割か3分割かという点において，1938年の地図帳の方が，1914年のそれよりも南北軸の考え方により沿ったものだと解釈できよう。

二つの地図帳に見る相違にもかかわらず，ここで重要なのは，両地図帳ともに，スマトラ内の地域の扱いが平等ではないことである。特定地域に関する単独地図の作成，あるいは特定地域に関する地図の早期の順番での掲載といった形で，オランダにとって利害のある地域は特別な扱いを受けている。具体的には，西スマトラや“デリとタパヌリ”が特別に扱われているが，前者は，スマトラ本島内でのオランダの直接支配がもっとも早かった地域であり，かつコーヒー強制栽培制度が導入された地域であった。また，後者は，19世紀後半以降，ヨーロッパ系プランテーションやキリスト教布教の対象となった地域である。後述するように，独立後のインドネシア，とくにスハルト時代の新体制においては，行政空間のこうした“差別的”取り扱いは見られず，行政空間の平等ないし平板な扱いが一大特徴となっている。

南北軸は，スマトラを一つの閉じられた空間としてイメージする。そして，閉じられた空間内の理事州を，“誰にでもわかる”（と思われる）明解な基準で配列する。南北軸の関心は内向的である。東西軸が行政区分の境界線や国境線とは無縁な認識枠であるのに対し，南北軸は，行政空間と国境線を前提としてはじめて存立する。南北軸のもとでは，スマトラと外部との関係，とりわけ東西軸の論理的帰結であるスマトラとマレー半島の関係は無視される。そして，スマトラは，“南北軸の生みの親，”バタビアを中心とするオランダ植民地支配の中に搦め捕られる。

19世紀末から始まり1920年代，30年代までの間に，オランダ東インドの経済的重心はジャワからスマトラに移行した。この経済的変化は，植民地支配の中でのスマトラの位置づけを高

め，バタビアを権力主体とする南北軸的認識枠の構築を促進したであろう。他方，大恐慌以降の世界経済の一般的停滞は，今世紀初頭以来，出稼ぎ地・移住地としてスマトラの人々に人気のあった英領マラヤの魅力を軽減させるものであり，このことは，南北軸的見方を，スマトラの人々にとってより馴染みのあるものとするものであったかもしれない。いずれにしても，これ以降，東西軸は南北軸の影に隠れ，歴史的状況によって間欠的に舞台に登場する存在となる。その一つの例が，独立戦争時代，共和国政府に多くの軍資金と武器をもたらすことになるスマトラ＝シンガポール間の密貿易ルートの活発化である。

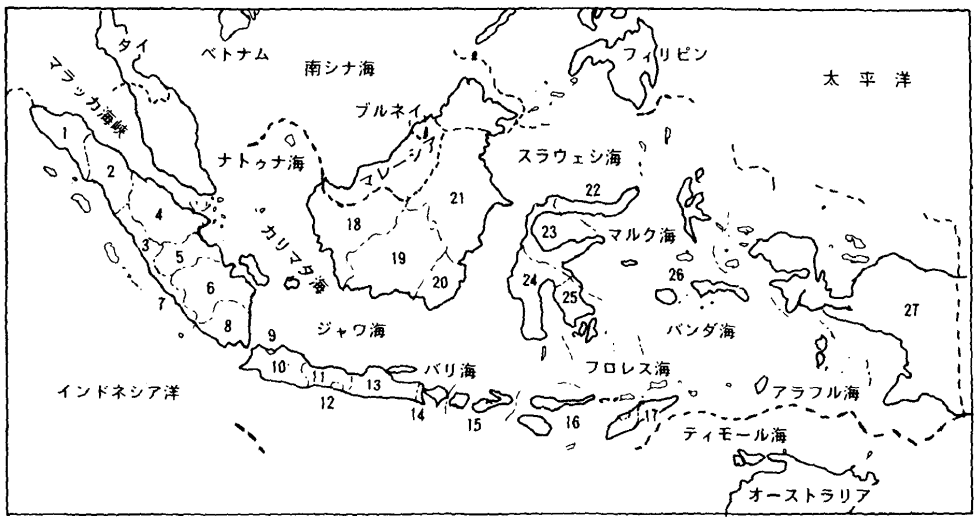
III 「インドネシアの俯瞰図」の登場

スマトラに関する南北軸的認識枠は，インドネシア共和国政府によってもほぼそのまま継承された。独立後のスマトラでもっとも新しい州のブンクルは1968年に形成されたが，この州を含むスマトラ8州の列挙順は，『1970年および1971年版インドネシア統計ポケットブック』[*Statistical Pocketbook of Indonesia 1970 & 1971* 1972] によれば，次のとおりである。アチェ，北スマトラ，西スマトラ，リアウ，ジャンビ，南スマトラ，ブンクル，ランプン（地図4のスマトラを参照)。この配列順は，オランダ時代のそれとあまり変わるところがない。違いは，前掲のオランダ時代の東スマトラとタパヌリが北スマトラ州に統合され，パレンバンとバンカ，ビリトンが南スマトラに統合されていることである。ただし，他の州も含め，両時代で，理事州と州の間には境界線に多少の異同がある。また，オランダ時代はブンクーレン，パレンバンであった配列順が，1970/71年のそれでは南スマトラ，ブンクルの順になっている。

本稿の議論との関係で，独立後の変化で重要なものは，新秩序体制になってから見られる。それは，スマトラの南北軸の認識枠が，インドネシアを見渡す俯瞰図の中に位置づけられたことである。

現在，インドネシアの27州は，通常，次のような順序で配列される。まず，配列はスマトラ北端のアチェから始まり，島を南下，ジャワ島に移ってからはジャカルタ，西ジャワ，中ジャワ，東ジャワへと進む。その後，バリからヌサトゥンガラ諸島を東進し，東ティモールに至ったのちには，カリマンタン諸州を西から東に移り，ついでスラウェシ島を北から南に移動，マルクを経由して最終的にはイリアン・ジャヤで終る，というものである（地図4)。つまり，スマトラ北端から始まった配列は，ジャワ，バリなどインドネシアの南辺諸州を西から東へと辿り，東ティモールのあとは，北辺の諸州を，カリマンタンからイリアン・ジャヤまで西から東へと辿る仕組になっている。インドネシア諸州を，西から東へと大きく二筆の動きで列挙するこの図式を，ここでは「インドネシアの俯瞰図」と呼ぶことにする。

インドネシアの国営テレビの夕方の番組に，「最愛の国，ヌサンタラ」（Negeri Tercinta



1	アチェ特別地域	10	西ジャワ	19	中カリマンタン
2	北スマトラ	11	中ジャワ	20	南カリマンタン
3	西スマトラ	12	ヨグヤカルタ特別地域	21	東カリマンタン
4	リアウ	13	東ジャワ	22	北スラウェシ
5	ジャンビ	14	バ　リ	23	中スラウェシ
6	南スマトラ	15	西ヌサトゥンガラ	24	南スラウェシ
7	ブンクル	16	東ヌサトゥンガラ	25	東南スラウェシ
8	ランプン	17	東ティモール	26	マルク
9	ジャカルタ特別市	18	西カリマンタン	27	イリアン・ジャヤ

----- 国　境
—·— 行政区分

地図4　インドネシア共和国の行政区分

出典：[*Statistical Yearbook of Indonesia 1994* 1995：iii]
注　：地図上の番号は出典のものを転載した。地図上の地名および海名はインドネシアの呼称による。

Nusantara）というのがある。ヌサンタラというのは，インドネシア諸島を指す雅語であるが，1980年代後半に始まったこの番組では，毎日各州持ち回りで州の諸相，とくに開発関係の様子が紹介される。毎月一日から27日まで順番で紹介されるわけであるが，その順番は，インドネシアの俯瞰図が示すところの順番と同じである。例えば，月の一日はアチェ，二日は北スマトラの紹介ということになる。また，学校で，生徒が，インドネシア27州の名称とその首都の名前を暗記するのもこの順番である。

既述のように，東西軸の認識枠は，スマトラの生態と歴史によって形作られたものであり，国の行政単位や国境線とは重なりにくい。これに対し，南北軸は，そもそもが覇権主義的権力のもとで意味を付与されたものだけに，行政空間「インドネシア」の俯瞰図とは親和性の高い認識枠である。そればかりではなく，インドネシアの俯瞰図は，南北軸と同じ様に，ある種の直線的方向志向のもとに構築されている。ここでは，両者が組み合わされることによって，お

互いの妥当性を補強し合う構造になっている。

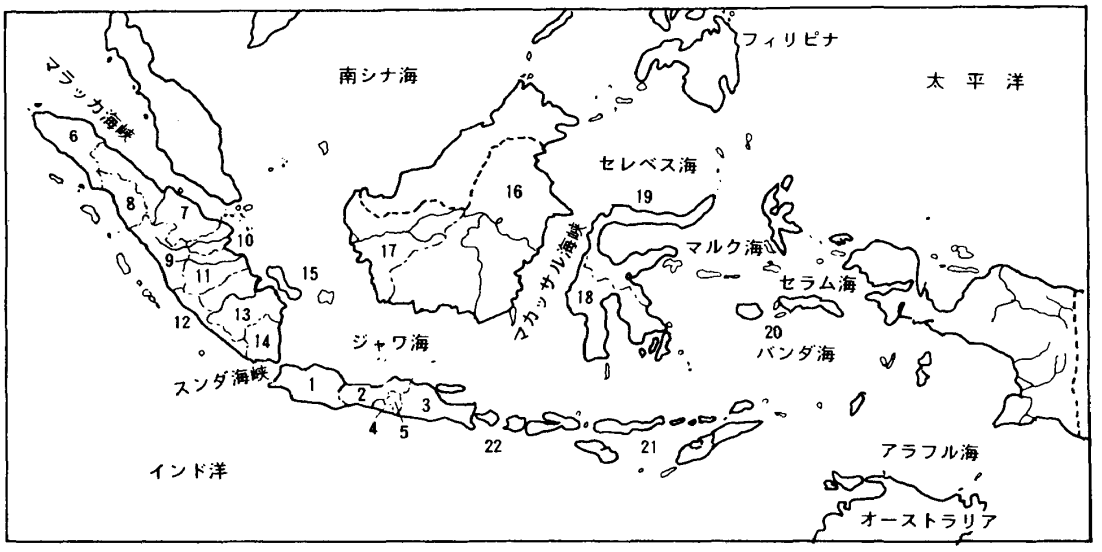
インドネシアの行政空間の俯瞰図がいつ頃形成されたかであるが，その手掛かりの一つは，政府発行の統計年鑑と統計ポケットブックに求められる。これらの資料を見る限り，俯瞰図の初出は1972年出版の『1970 & 1971年版インドネシア統計ポケットブック』である。ただし，1972年以降，「インドネシアの俯瞰図」が必ずしもつねに踏襲されたわけではなかった。この状況に変化が起こるのは，1978年出版の『1976年版インドネシア統計年鑑』[*Statistical Yearbook of Indonesia 1976* 1978] からである。この統計年鑑が対象とする1976年という年は，インドネシアが東ティモールを併合した年で，共和国の現在の国境が最終的に線引された年であった。1978年，1979年以降の統計年鑑，統計ポケットブックは，俯瞰図を恒常的に採用しており，1984年出版のものからは，図4のような地図も添付され，俯瞰図が一目瞭然な形で視覚的に提示されるようにもなってきている。[7)]

比較のため，植民地時代の，オランダ東インド全体の行政空間の認識枠がどのようなものだったかを見ておこう。よく知られているように，植民地時代の大きな認識枠は，“ジャワおよびマドゥラ”（Java en Madoera）と“外領”（Buitengewesten）の対比であった。再び1939年の『政庁要覧』を見ると，この対比を大きな枠組としながら，オランダ東インドの行政単位は次のような順番で記載されている。“ジャワおよびマドゥラ”から始まる配列の順序は，スマトラを北から南へと列挙，その後ボルネオ，セレベス，モルッカ（Amboina, Toeal, Ternate, Noord Nieuw Guinee, West Nieuw Guinee を含む），ティモール（Timor en eilanden, Soembawa en Soemba, Flores を含む）へと移ったのち，“バリとロンボック”で終るというものである（地図5）。[8)]

大雑把にいって，“ジャワおよびマドゥラ”から出発した配列はほぼ時計回りで進行し，“バリとロンボック”で終る形式になっている。「時計回り」という形容で把握可能なように，この配列は，“ジャワおよびマドゥラ”を明示的な始点とし，同じ場所を暗黙の終点としながら配列の円環を閉じる。意識的にしろ，無意識的にしろ，ここで強調されるのは，オランダ東インドの中の“ジャワおよびマドゥラ”の中心性，より正確にはジャワの中心性である。“ジャワおよ

7） 統計年鑑，統計ポケットブックにおいては，それもとくに1980年以前のそれにおいては，全巻を通じて必ずしも統一的な州の列挙順が使用されているわけではないため，資料の歴史的比較にあたっては，「行政区分」（*pembagian daerah/administrative units*）の項における州の列挙順を参考にした。

8） 参考のため，1938年の『東インド報告書』を見ると，スマトラ内の理事州の配列順は，『政庁要覧』のそれと異なるが，東インド全体については，両者の間に大きな違いは存在しない。同時代の重要な出版物に，1930年人口センサスの報告書がある。東インド諸地域のセンサスの集計結果の列挙順は，1939年の『政庁要覧』とほぼ同じであるが，重要な相違は，最後の3地域が“バリとロンボック，”ティモール，モルッカの順番になっていることである［*Volkstelling 1930 Deel VIII* 1936 : 60–77］。



1	西ジャワ	8	タパヌリ	15	バンカとビリトン
2	中ジャワ	9	スマトラ西海岸	16	ボルネオ南部と東部
3	東ジャワ	10	リアウと属領	17	ボルネオ西部
4	ジョクジャカルタ	11	ジャンビ	18	セレベスおよび属領
5	スラカルタ	12	ブンクーレン	19	マナド
6	アチェおよび属領	13	パレンバン	20	マルク
7	スマトラ東海岸	14	ランポン地区	21	ティモールおよび属領
				22	バリとロンボック

----- 国　境
—·— 行政区分

地図5　オランダ東インドの行政区分

出典：[Reijen dan Lekkerkerker 1938：35–36；*Regeeringsalmanak 1939* 1939：152–169]
注　：地図上の番号は『1939年版政庁要覧』の掲載順に基づいて作成した。

びマドゥラ”対“外領”の対比という大きな二分法の枠組自体が，そして“外領”という言葉遣い自体が，同様の認識枠に支えられている。

時計回りの認識枠においても，前述の1914年，1938年出版の地図帳においても，オランダ植民地権力は，植民地支配下の行政空間を平等に扱おうとはしない。植民地権力の利害にとって重要な地域が，行政空間の認識枠の中で強調される仕組になっている。

これに対し，1978年以降定着する「インドネシアの俯瞰図」は，インドネシアの東西の広がりを強調する。インドネシアには，「サバン（Sabang）からムラウケ（Merauke）まで」という表現がある。スマトラ西北端の港名と，イリアン・ジャヤ東南端の港名を冠したこの表現は，「政治空間」インドネシアの東西の版図を単純明解に示している。この政治空間は，俯瞰図の形成・定着によって，はじめて内的秩序を備えた形で表現可能となった。それも，東西に長く広がる政治空間，行政空間の同質性を強調するような形で。

インドネシアの俯瞰図は，文字どおり「インドネシア」を一望のもとに俯瞰する。しかし，

俯瞰する主体は，ここには明示されていない。オランダ時代の時計回りの認識枠も，いってみれば俯瞰図である。この図において，俯瞰する主体はジャワ，なかんずくバタビアないしバタビアのオランダ植民地政庁である。しかし，「インドネシアの俯瞰図」では，ジャワは特別視される存在ではない。俯瞰図の「インドネシア」は同質な空間から構成されている。すべての行政空間，とりわけ州は，俯瞰図では，理念的には同等・平等である。そして，俯瞰する「主体」，明示されざる「主体」は，国民一人一人であり，より的確には，スハルト政権が描く望ましき国民の姿であるといえそうである。

IV 「俯瞰図」誕生の歴史的背景

統計年鑑，統計ポケットブックをチェックすると，独立後初期の行政空間の配列順に，統一的・画一的な形があったわけではないことがわかる。にもかかわらず，俯瞰図が定着するまでのそれは，オランダ時代の時計回りの配列順に，大筋において近似していた。

大きな違いは東インドネシアに見られる。独立後の東インドネシアの行政空間の扱いは，時計回りに準ずることなく，バリから東へ，さらにはマルクから“西イリアン”へと配列している。つまり，行政空間の配列は，オランダ時代のようにジャワから始まってジャワに収斂する自己完結的なものではなく，独立後問題の多い東の国境隣接地域を強調している。うがった見方をすれば，東方への膨張主義的配列だと特徴づけられる。ちなみに，1960年代前半に出版された小学校地理教科書3例を確認した限りでは，行政空間の配列において，上とほぼ同様の傾向が見られた［Soerjomoeljono c. 1961 ; Rapani 1961 ; Nasution dan Lagut 1964］。[9)]

時計回りに代わる「インドネシアの俯瞰図」の誕生が1970年代初頭であり，その定着が同年代末だとして，このタイミングは偶然ではないであろう。インドネシアにとって1970年代がどのような時代だったかを，ここで概観してみよう。

1969年にイリアン・ジャヤを正式にインドネシア領とし，また1976年に東ティモールを併合することによって，現在の共和国の国境は，インドネシアの政治指導者，軍指導者の理想に沿った形で最終的なものとなった。そして，内政面では，1970年代半ばまでには，共産党勢力とその同調者を一掃し，イスラーム諸グループや他の知識人グループの政治的活力を殺ぐことにも成功する。スハルト政権にとって，その後の内政上の懸案は，治安維持のための制度をいかに整備し，精緻化していくかであった。

9） 3例のうち，Rapani［1961］とNasution dan Lagut［1964］の初版は，それぞれ1950年と1951年である。両教科書の前書きによると，1952年の教育文化省のカリキュラム改正にともない，必要な改訂を行なったとしている。その後の改訂については，行政区分の変更に対応したもののみであると記されている。

経済面では，新秩序体制の初期から，米増産のための“緑の革命，”ついで人口抑制のための家族計画を推進させたスハルト政権は，1969年には第一次五カ年計画（1969/70～1973/74財政年度）を開始した。そして，1973年の第一次オイルショック，1979年の第二次オイルショック（産油国インドネシアにとってはオイルブーム）のお蔭もあって，1970年代末までには経済基盤確立と経済発展の目処をつける。それも，スハルト政権の開発政策の力点は，第一次五カ年計画の時代はジャワが中心であり，第二次五カ年計画（1974/75～1978/79財政年度）あたりから，ジャワ外へと目配りをする余裕が生まれ，したがってインドネシア全体の認識枠の必要性が増してきたと考えられる。そして，当初から25年長期開発計画を策定した政権が，その中間点である第三次五カ年計画（1979/80～1983/84財政年度）に入るのが，1970年代末のことである。

行政の分野では，スハルト政権は，1970年代に地方行政に関して二つの法律を制定している。「地方行政の原則に関する1974年制定法第5号」（*Undang-undang No. 5 tahun 1974 tentang Pokok-pokok Pemerintahan di Daerah*）と「村落行政に関する1979年制定法第5号」（*Undang-undang No. 5 tahun 1979 tentang Pemerintahan Desa*）である。これらの法律を通じて，スハルト政権は地方行政の斉一化・統一化を促進し，中央集権の度合を増していくことになる。

1970年代末に定着した“サバンからムラウケまで”の「インドネシアの俯瞰図」は，こうしたインドネシアの社会，政治，経済的な一連の動きと連動したものにほかならないであろう。国の政治的，経済的安定が成ったところで，「インドネシア」とその下位行政空間を俯瞰し，配列し，管理し，運営し，五カ年計画に則って開発していくために，「インドネシア」の見方の画一化が肝要となったと考えられるからである。

ちなみに，「インドネシア」を管理し，運営し，開発していくうえで，「背番号」などによる国民の管理と，数量データ一般の収集は不可欠である。前者の代表例としては，住民登録証（Kartu Tanda Penduduk，通称KTP［カ・テー・ペー］）と公務員番号（Nomor Induk Pegawai，通称NIP［ニップ］）が挙げられる。住民登録証は，名刺大の身分証明証で，法律上の成年である17歳（選挙権行使開始年齢）以降，取得・携帯が義務づけられている。他方，公務員番号は，省庁ごとにすべての公務員に与えられる一種の身分登録番号である。これらがいつ頃導入されたのか，私には不明である。住民登録証に類したものは，スカルノ時代にも存在したようであるが，現在の住民登録証の直接の前身は，おそらくスハルト体制下で，共産党員とその同調者を同定することを主目的として，1970年以前に都市を中心として導入されたものであろう。しかし，その導入・実践が多少とも本格化するのは，五年ごとの総選挙が定着する1970年代後半のことではないかと思われる。なお，スハルト政権下の初期の選挙は，1971年と77年に実施されている。

公務員番号については，これに類する番号は，おそらく最初に軍に導入されたのであろうが，公務員の場合，「インドネシア公務員組織」（Korps Pegawai Republik Indonesia，略称KORPRIで，1971年末に設立）を通じての公務員の政治的管理・動員の進捗化と並行して，官僚機構の末端にまで拡大していったものと思われる。現在，中央から末端レベルにいたるまで，役所で作られる文書に公務員の名前が記される場合，必ず公務員番号も併記される。いつ頃から，このように公務員番号が可視化されるようになったのかであるが，統計出版物を手掛かりにすると，中央統計局の局長が，定期年次出版物の「序」に，名前，職名とともに自分の公務員番号を記すようになるのが，1978年出版の『1977/1978年版統計ポケットブック』からである。ちなみに，既述のように，同年出版の『1976年版インドネシア統計年鑑』以降，「インドネシアの俯瞰図」が統計出版物において恒常的に使用されるようになっている。

上記のいずれの例も，1970年代末までには，「背番号」によって国民や公務員を管理しようとする動きが本格的に始動したであろうことを窺わせる。[10)]

スハルト体制下におけるデータ収集の活発化を象徴するのが，独立後の最初の本格的人口センサスともいえる1971年センサスの実施と，その後のセンサス結果の出版である。1974年には，このセンサスの結果は州別にも出版されるにいたっており，その出版順は俯瞰図におけるものと同じであった。[11)]

インドネシアに関する統計類の出版が盛んになるのも，おそらくこの時期以降のことであろう。その一つの表れが，統計年鑑の出版開始であると考えられる。独立後の最初の年次統計集の出版は1956年で，この年，『1956年版インドネシア統計ポケットブック』が出版されている。これに対し，『インドネシア統計年鑑』の初版は1975年で，1975年版の年鑑である。ポケットブックよりはるかに大部な年鑑が1970年代半ばに出版されたということは，この時期，新秩序体制における統計類の重要性が増したということであり，とりもなおさず，インドネシアの行政空間に関するデータを，個々の出版物を通底していかに整合性をもたせて提示するかが，重

---

10) 国民総背番号化へ向けての新たな動きが，1995年に見られる。あたかもインドネシア独立50周年記念行事の一環のようにして，この年の8月18日，“NIK付きKTP”ないし“全国（National）KTP”なるものが，内務大臣の手によってスハルト大統領夫妻に交付されている。NIKとはNomor Induk Penduduk（人口番号）の略で，出生証明書，パスポートなどの発行もいずれNIKの存在を前提とし，出生地，生年月日，学歴，職業，政治犯罪上の前科，華人血統の有無などに関する情報が，16桁のNIKに対応してデータベース化されることになっている。新KTPの取得料はRp. 3,000（1995年8月中旬現在で約130円）で，3年から5年の間に全国的に実施される計画である。（“KTP Ber-NIK Diserahkan kepada Presiden Soeharto,” *Kompas*, 19 Agustus 1995, p. 3 ; “KTP Baru tak Cantumkan WNI Asli atau Keturunan,” *Kompas*, 23 Agustus 1995, p. 8.）

11) 中央統計局（Biro Pusat Statistik）出版の『1971年人口センサス シリーズE』（*Sensus Penduduk 1971 Seri E*）を参照。このシリーズは，東チモールを除く26州をカバーしている。なお，独立後最初のセンサス，1961年センサスの結果は，生データの1パーセント・サンプルについて集計結果が出版されたにすぎない。

要な問題となったであろうことを示唆している。

ただし，付言すれば，「インドネシアの俯瞰図」が唯一のインドネシアの見方でないことは，東ティモールの扱いをめぐる相違に顕著である。地図4が示すように，俯瞰図の流れからすれば，東ティモールの“本来の”位置づけは，東ヌサトゥンガラと西カリマンタンの間である。しかし，東ティモールは，しばしば27番目の州としても配列される。小学校の社会科教科書の一部（例えばJenen Bale [1991]）や，前述のテレビ番組「最愛の国，ヌサンタラ」における東ティモールの扱いに，これは見られる。インドネシア共和国内における，東ティモールの曖昧な位置づけを象徴するかのような扱いの揺れである。

東ティモールの扱いに関する違いがあるとはいうものの，「俯瞰図」的インドネシアの見方は，その後，行政，教育，マスメディアなどを通じてインドネシア社会に浸透してきている。この過程を側面から助けたのが，1960年前後以降，とくに現27州の確立以降の，インドネシアの行政空間の安定性である。オランダ時代，日本軍政期，そして独立初期の20年間，行政空間の線引きが変わることは，けっして珍しいことではなかった。しかし，この20年，30年を見ると，行政都市（*kotamadya*）の数の増大ないしその境界の拡大を除き，州，県の境界の安定性には顕著なものがある。[12] これは，今世紀のインドネシアの歴史の中でも稀有なことである。行政空間の安定性は，一方で行政空間が人々の生活に与える影響力を増大させるものであると同時に，他方で，「インドネシアの俯瞰図」の浸透を促進するものでもあった。

V　行政空間と「地方文化」

1970年代半ばから後半にかけてのインドネシアでは，政治・経済面においてだけでなく，文化面，教育面においても，いくつかの興味深い政策が遂行されている。まず，スハルト大統領夫人の唱導のもとに建設された「ミニチュア版『うるわしのインドネシア』公園」（Taman Mini Indonesia Indah），通称タマン・ミニが，1975年にジャカルタ近郊にオープンした。この公園は，インドネシアの27州の「地方文化」（*kebudayaan daerah*）ないし州文化を，首都に一堂に集めて展示することを目的とした施設である。公園の真中には人造湖が配され，湖面にはインドネシア諸島を型どった人造の島々が浮かぶ。この湖を取り巻くようにして，27州の地方文化を展示するパビリオンが並んでいる。パビリオンの形は，各州の代表的な“伝統的”家屋様式を模したものである。パビリオン内には，当該州の代表的なエスニック・グループの“伝統的”結婚衣裳を纏ったマネキンが展示され，州の工芸品，楽器，農具，生活用具なども展示

12）ただし，1990年代に入ってから，県，郡（*kecamatan*）の行政空間の再編（具体的には細分化）が，全国で進みつつあるように見える。

されている。週末には，各州の“伝統的”音楽や踊りが演じられたりもする。

「インドネシアの俯瞰図」がまだ確定していない時代に計画され，建設されたためか，パビリオンの配置は俯瞰図における27州の配列とは異なっている。[13] しかし，27州の文化を一望のもとに俯瞰できる形で提示しようとしている点において（人造湖の上を行くゴンドラに乗れば，文字どおり「地方文化」を俯瞰できる），タマン・ミニは，俯瞰図と同じ精神構造を有している。

タマン・ミニは，州文化ないし地方文化をどのように概念化するか，そしてそれをどのように表出するかのモデルとなったもので，その後のテレビや公式行事における地方芸能などのあり方にも，大きな影響を与えるにいたっている。

同じ文化面で，教育文化省は，1976/77年度から「目録作成ならびに記録化プロジェクト」(Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi）を発足させた。その目的とするところは，27州別に地方史，地方の民話，地方の伝統と婚姻儀礼，結婚衣装，子供の遊び等々に関する「目録作成ならびに記録化」を図るプロジェクトである。

現実に，政策上の連関があるかどうかは別にして，タマン・ミニの開園や「目録作成ならびに記録化プロジェクト」の延長線上の動きとして，1980年代になると，州ごとの博物館建設計画が全国で始動することになる。

教育文化省は，また，1970年代半ばにインドネシア的公民教育として，独立五原則であるパンチャシラに基づくとされる教育，パンチャシラ道徳教育の導入を策定し，70年代後半から1980年，81年までの間に，その体制作りを完成させた。全国統一の「パンチャシラ道徳教育」教科書も作成され，おそらくオランダ時代も含めてインドネシア史上ではじめて，全国斉一の道徳教育実施のための環境作りを達成している。この授業で強調されることの一つが，インドネシアの地域的・種族的・宗教的多様性と，その中での国の統一である。

これらの政策の帰結として，各州は，それぞれの州独自の“伝統的”家屋，物質文化，結婚衣装，芸能，国民英雄，独立闘争史などと結び付けられ，固有の地方文化，地方色を付与されることになった。27州はたんなる地図上の行政空間以上のもの，あるいは行政機構図上の名称以上のものとなったのである。州は，その文化等々について，認識・同定し，学び，一体感を持ち，建築様式，結婚衣裳のように個々人でも模倣できる存在となった。そして，州は，オランダ時代と比べて，「地方文化」，州境を示すモニュメント（この建設は1980年代に全国的に盛んになったと思われる）などに代表されるように，はるかに“実体”のあるものとなり，“実体験”できるものとなったのである。

---

13) パビリオンの配置には，これといったパターンがあるとは思えないが，自動車に乗った見学者のための順路を辿ると，ジャワ，ヌサトゥンガラ，スラウェシ，カリマンタン，スマトラといった大雑把な地域分けが認められる。

州に地方色を付与する主体は国家である。「地方」(*daerah*) という言葉自体，対語としての「中央」(*pusat*) ないし「国家（の)」(*nasional*) を想定することによって成立する概念である。同様に，同列に並べられた多様かつ雑多な地方色・地方文化が，個々に，あるいは全体の総和としても意味をなすのは，あくまでも「中央」「国家」との関係においてでしかありえない。地方色は，「地方」の独立闘争史が予定調和説的に行き着くところの「インドネシア共和国」の枠組，共和国の国是「多様性の中の統一」の枠組，さらにはパンチャシラ的道徳観の枠組の中においてのみ，その存在意義を獲得することができる。そして，この図式では，「インドネシアの俯瞰図」において各行政空間が同等，平等に「インドネシア」を形成していたように，地方色・地方文化も，理念的には，同等，平等にインドネシアの民族，文化，歴史を形成している構造になっているのである。

VI　インドネシアの「ジャワ化」と「俯瞰図」

理念的には，各行政空間，各「地方」が同等，平等に「インドネシア」に参画していることが強調されるにもかかわらず，現実には，オランダ時代と同じ様に，政治，経済，文化的に，ジャカルタやジャワが優位であることに変わりはない。むしろ，優位が増大しているといった方がよいだろう。財政に対するジャカルタの支配は強く，スハルト体制下でのインフラストラクチャーの整備は，オランダ時代の蓄積があるとはいうものの，ジャワでもっとも顕著である。情報伝達の上で現在もっとも影響力のあるテレビのキーステーションは，ジャワ，とりわけジャカルタに集中している。行政面における中央集権化は，スハルト時代になってから一段と強化されてきている。

それだけではない。ジャワ島の外へ，「ジャワ」が種々の形で進出・侵出してきている。これをスマトラの事例で見ると，1970年代末のスマトラ縦断道路の開通以来，スマトラとジャワの物理的・心理的距離は，それまでとは比べものにならないほど近いものとなった。現在では，スマトラ，とくにスマトラの南半分を走るバス，トラックの少なからぬ部分は，ジャワのナンバープレートをつけて走っている。同地域の幹線道路沿いには，ジャワのソバ屋，屋台，レストランが並び，これらの場所ではジャワ語が一般的に話されている。オランダ時代からジャワ農民が入植しているランプン州では，幹線道路沿いに見る集落のたたずまいは，中ジャワ，東ジャワで現在見るそれと同じである。家々はセメント製の門柱を有し，その形，色，家族計画のマークをあしらった飾りなどは，地域によって統一されている。ランプン州は，現実には北ジャワ州だと冗談でいわれるほど，この州における「ジャワ」の存在は顕著である。

1980年前後には，ピール（PIR）と呼ばれる新しい政策移住（*transmigrasi* トランスミグラシ）プロジェクトが始まっている。ピールは，「民衆核化農園」(Perkebunan Inti Rakyat) の

略で，民衆小農園と，核となる大農園を複合体にまとめ，ゴム栽培，アブラヤシ栽培などのために，森林の伐採，開拓を行なおうとするものである。このための小農，大農園労働者の供給源となったのは，人口稠密なジャワである。

従来の米作を中心とする政策移住では，水稲適地ないし水稲地への変換可能という生態的条件が，移住プロジェクトの拡大を制限していた。ピールでは，こうした制限は存在せず，これ以降，スマトラといわず，カリマンタン，スラウェシ，イリアン・ジャヤなど，インドネシア各地へのジャワ人移民の数が飛躍的に増大した。ランプン州のジャワ人口は，かなり以前から“土着”の人口数を上回っているが，ピールの導入以降ブンクル州も同じ道を辿りつつあり，ジャンビ州，リアウ州，あるいは西カリマンタン州などでも，同様の状況が現出するのは時間の問題であろう。[14)]

スマトラ縦断道路の完成，ジャワ人移民の増大，テレビにおけるスマトラを扱う番組の恒常化（例えば「最愛の国，ヌサンタラ」）は，交通の便，人間的ネットワーク，情報の面で，スマトラをジャワ人にとって親しみ易いものとし，スマトラへのジャワ人の移動を益々増大させている。[15)] 現在では，従来の役人，軍人，警察官，政策移住民だけではなく，多くの出稼ぎ人がジャワからスマトラを目指す。私の調査地のリアウ州の一地域を見ても，週市には既制服を売るジャワ人行商人がおり，村々にまでジャム（ジャワの生薬）売りがやってくる。

ジャワ人のスマトラへの移動，より一般的にはジャワ外への人口移動は，今後とも増加することはあっても，減少することはないであろう。政策移住担当大臣は，出稼ぎ好きなミナンカバウやブギス人を良い手本に，ジャワ人，スンダ人も積極的に出稼ぎ，移住に出るよう奨励している。そして，同じ省の高官は，ジャワ島の人口扶養力を考えると，島の人口 11,000 万のうち，37 パーセントはジャワ島外に再定住が必要だと語っている。[16)]

ジャワからの人口移動と平行した動きとして，「ジャワ」はスマトラの地元の人々の日常生活の一部を形成するようになってきてもいる。大豆を醗酵させて作った豆腐やテンペ（*tempe*），若いヤシ葉（*janur*）で作った結婚式の飾り，ジョグロ（*joglo*）と呼ばれる真中の突出した屋根，王宮門を模した門柱，蓮の花の形をした門柱飾り，ジャムを飲む習慣等々，こうした「ジャワ的」なものが，スマトラの農村部の生活にも徐々に見られるようになってきている。

このような現実が進展していればこそ，行政空間の同質性，「地方文化」の平等性を強調する認識枠は，為政者側にとって重要なイデオロギー的装置であるといえる。

そもそも，スハルト体制は，「地域主義」（*daerahisme*），「種族主義」（*sukuisme*）に悩まさ

---

14) カリマンタン島への大量のジャワ人の進出を象徴するかのように，同島で現在もっとも購読部数の多い新聞は，おそらくスラバヤで発刊されている『ジャワ・ポス』（*Jawa Pos*）である。

15) 同様の情報の回路を通じて，実はジャワ外からのジャワへの移動も盛んになってきている。

16) “Govt boost transmigration,” *The Jakarta Post*, 19 May 1995, p. 2 ; “37% of Java's 110 m people to be resettled,” *The Straits Times*, 2 March 1996, p. 20.

れたスカルノ政権に取って代わって登場した政権である。それだけに，地方反乱に代表される「地域主義」「種族主義」の台頭には敏感な政権である。他方，政治的安定の達成，治安維持，開発のために，ジャカルタを中心とする中央集権の強化を目指し，さらにはインドネシアの「ジャワ化」を推進してきた政権でもある。こうした政治的脈絡の中で，「インドネシアの俯瞰図」は，「インドネシア」の同質性，州・地方・種族の同等性・平等性のイメージを投影することによって，一方で「地域主義」「種族主義」の動きを中和し，他方でジャワの突出を包み隠す。「インドネシアの俯瞰図」には，はたして当初からこのような政治的意図が織り込まれていたかどうかは別にして，「俯瞰図」に凝縮された「インドネシア」の見方は，スハルト体制下の国民統合，国家統合のあり方をよく体現するものだということができよう。

おわりに

1995年，地方分権と地方自治（*otonomi daerah*）の促進を目的とした法律，政府令第45号（*Peraturan Pemerintah Nomor 45 tahun 1995*）が発布された。1974年制定法に依拠するこの政府令のもとでは，将来的には州の役割は縮小され，県がより重要な地方行政単位として機能することになっている。[17]

インドネシアの俯瞰図は，基本的に州を単位としており，地方文化の構築・表出も州を単位としている。それだけに，地方分権，地方自治に関するこの法律が，「インドネシア」の認識枠に将来どのような影響を与えるのか，今後の興味ある問題である。

こうした新しい政策が見られる一方で，他方では，現在インドネシアと隣国との間で複数の“成長地帯”構想が進捗中であるが，インドネシア側で構想の中心に位置づけられているのは州である。例えば，インドネシア・マレーシア・シンガポール間の成長の三角地帯構想では，リアウ州と西スマトラ州がインドネシア側の受け皿として想定されている。マレーシア側の当事者であるジョホール（Johor）州の首相によると，将来はスマトラ東海岸の港ドゥメイ（Dumai）から，西スマトラの内陸都市ブキティンギ（Bukittingi）経由で，西海岸の都市パダン（Padang）までを結ぶ400キロの有料高速道路を建設し，労働集約的産業をパダンに移転する計画もあるとのことである。成長地帯構想は，インドネシア・マレーシア・タイやブルネイ・インドネシア・マレーシア・フィリピンの間にも存在し，つい最近の発表では，インドネシアの18州が，いずれこれらの構想に関係することになるという。[18]

こうした動きは，中央政府の地方行政に関する上記新政策と矛盾するだけでなく，各地の州

17）“Otonomi Daerah : Bukan Otonomi Palestina,” *Gatra*, 29 April 1995, pp. 33－34.

18）“Johor eyes Indonesian business opportunities,” *The New Straits Times*, 9 March 1996, p. 6 ; “Indonesia to add 13 more provinces in growth areas,” *The New Straits Times*, 18 March 1996, p. 25.

と隣国との間の経済関係を，国境を越えて緊密化させるものでもある。そして，この関係は，必ずしも経済だけに留まるとは限らない。リアウ州の場合を見ると，従来この州は，ジャワ人，ミナンカバウ人など，外来者に州の政治・経済を牛耳られてきた。しかし，近年，州“土着の”ムラユ人のエリートの中に，自種族の誇りと経済力の回復を目指して，ブミプトラ（Bumiputra）政策のもとで躍進目覚ましいマレーシアのムラユ人（マレー人）と文化的，経済的に提携しようとの動きが見られる。[19] 国境を越えた同様の動きが，将来的に，カリマンタン，スラウェシなど，他国との国境隣接地帯に現出しても不思議はないであろう。

「インドネシアの俯瞰図」は，閉じられた政治空間を前提として，さらには州を基本単位として意味をなす認識枠である。グロバリゼーションの時代の中で，そして中央政府による地方行政に関わる新政策の施行を控え，イデオロギー装置としての「俯瞰図」の持つ意味は，近い将来，再検討されるべき時期が来るのかもしれない。

参 考 文 献

Atlas van Tropisch Nederland. 1938. Amsterdam : Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundig Genoopschap.

Gelder, W. van. 1914. *Atlas Ketjil Hindia-Nederland dengan Kitab Peta.* (Tjetakan jang kelima.) 's-Gravenhage : np.

Indisch Verslag 1938. 1938. Batavia : Landsdrukkerij.

Jenen Bale. 1991. *Ilmu Pengetahuan Sosial 2.* Jakarta : Balai Pustaka.

Kato, Tsuyoshi. 1982. *Matriliny and Migration : Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia.* Ithaca, N. Y. : Cornell University Press.

加藤　剛. 1992.「スマトラ世界」『講座東南アジア学　別巻東南アジア学入門』矢野暢（編），202–219ページ所収. 弘文堂.

Nasution, A. J. ; dan Lagut glr Baginda Setia Partahian. 1964. *Ilmu Bumi Indonesia untuk Sekolah Dasar kelas IV dan V Djilid I & II.* Medan : Islamyah.

Rapani. 1961. *Ilmu Bumi Tanah Air untuk Sekolah Rakjat kelas IV dan V Djilid I & II.* Bukittinggi : Nusantara.

Regeeringsalmanak voor Nederlandsch-Indië 1931 Eerste Gedeelte. 1931. Weltevreden : Landsdrukkerij.

Regeeringsalmanak voor Nederlandsch-Indië 1939 Eerste Gedeelte. 1939. Batavia : Landsdrukkerij.

Reijen, J. van ; dan C. Lekkerkerker. 1938. *Atlas Hindia-Néderlan dan Keterangannja.* (Tjetakan jang ketiga.) Batavia : J. B. Wolters.

Sandy, I Made. 1986. *Atlas Indonesia : Buku Pertama Umum.* Jakarta : P. T. Dhasawarna & Geografi-FMIPA-UI. (Cetakan ke 6.)

Soerjomoeljono. c. 1961. *Ilmu Bumi Indonesia untuk kelas V dan VI Sekolah Rakjat.* Surabaja : Marfiah. (Tjetakan Ke I.)

Statistical Pocketbook of Indonesia 1970 & 1971. 1972. Djakarta : Biro Pusat Statistik.

Statistical Yearbook of Indonesia 1976. 1978. Jakarta : Biro Pusat Statistik.

Statistical Yearbook of Indonesia 1994. 1995. Jakarta : Biro Pusat Statistik.

『東南アジア要覧 1992 年版』. 1992. 東南アジア調査会.

Volkstelling 1930 Deel VIII : Overzicht voor Nederlandsch-Indië. 1936. Batavia : Landsdrukkerij.

19) この件については，1995 年 10 月 4 日～6 日にかけて，オランダの International Institute for Asian Studies で開催された国際会議，“Riau in Transition” において知ることができた。